

第三節 高山の魅力

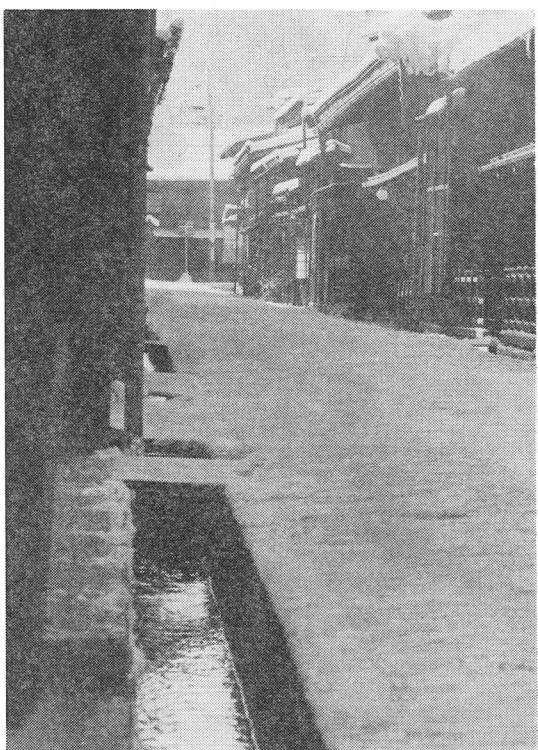
高山文化の根 高山は町人の町である。城下町高山は飛驒国唯一の商業経済活動の中心地として成立し、天領化以後さらにその性格を強め、飛驒の富は高山、なかでもその町人達に集中した。高山町人の豊かな財力が、今日小京都と称せられるほどの質の高い文化を築き上げてきたものと言える。しかし高山文化を生み出したものは町人の力だけではない。代々茶道にすぐれた理解を示し、京文化に精通していた金森家が高山文化の成立に果した役割は大きい。また天領時代には江戸文化が容易に導入されたことは想像に難くない。金森家時代の京文化、天領時代の江戸文化という、当時の最高水準の文化が期せずして高山にもたらされ、これを財力にすぐれた町人たち（特に一部の旦那衆と呼ばれる富豪）が自分たちのものとして育て上げたものが、今日見る高山文化であろう。

文化遺産 高山文化の質の高さは、数々の文化遺産によって我々に示される。とりわけ町家建築と祭屋台は、町人文化の粋を集めたものといえるであろう。現存する最古の町家は19世紀初の松本家住宅、屋台は文化11年の布袋台である。ともに幕末のものであり、それ以前のものについては具体的に知ることができない。しかし幕末から明治初は、高山町人の財力がもっとも高まったときであり、その時期の所産が数多く残されていることは、高山文化の本質を理解する上で幸いなことである。

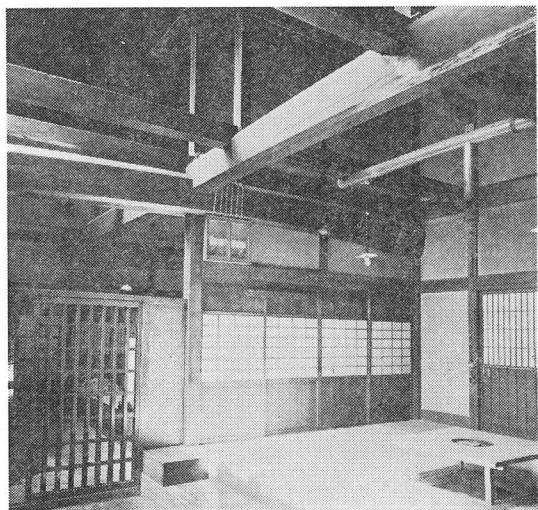
町家については、後章で詳述するので、その一部に触れるにとどめる。町家は幕末から明治時代にかけての度重なる大火によって多くの多くが失なわれたが、重要文化財指定の日下部・吉島両家住宅をはじめ、すぐれた遺構は少くない。加えて天保14年（1843）の町家絵図・小前帳によって当時の代表的な町家について、その詳細を知ることができる（第2章第4節参照）。

これらの町家は外観上、地役人たちの家に比べ門構えはなく、棟は低く、質素な造りではあっても、内部はその財力に物を言わせて高価な材料をふんだんに使っている。しかし決して華美なだけに走ることなく、その節度を保っている。高山町人の心意気が偲ばれるとともに、造型力の優秀さがよくわかる。高山でよく使われる「こうとな」という言葉が、町家建築的一面をよく表わしている。天領時代の制約を受けた中で生まれた代表的な町家は、松本家・原田家住宅などである。代官所がなくなり、自由な空気の中で、何の制約も受けることなく生み出された町家の代表として日下部家・吉島家・平田家・土川家住宅などがあげられる。

ここで、先ほどの天保14年町家絵図に記された23軒の町家平面を見ると、すべてに茶室が備えられている。また現存する町家の多く



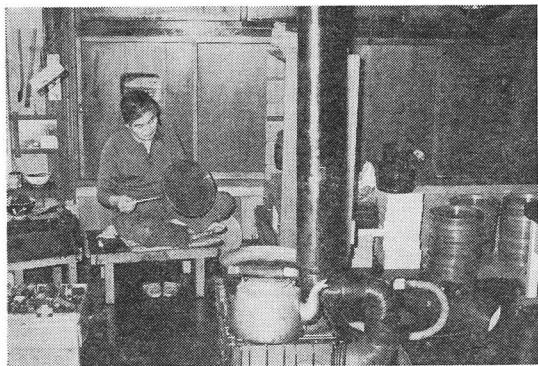
1-18 水路と町並



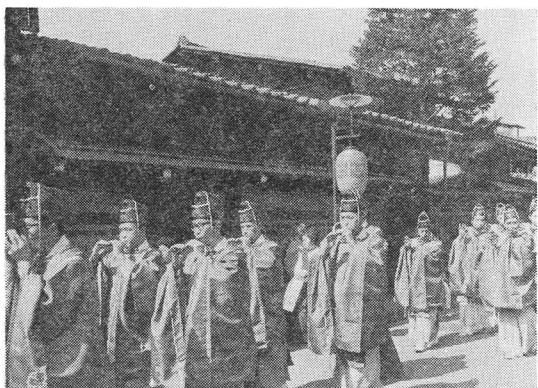
1-19 町家の内部

* 1 岡村利平「飛驒編年史要」住伊書房、1921

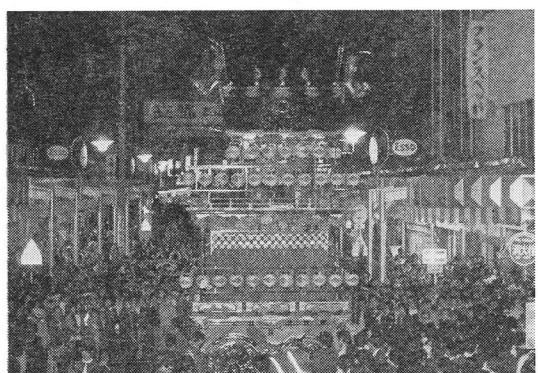
* 2 宮本常一「町のなりたち」未来社、1968



1-20 春慶塗作業風景



1-21 町を練り歩く祭の行列



1-22 高山祭の屋台



1-23 祭に装う町並

も茶室を持ち、高山町人の間では、茶道が日常生活の一部となっていたことを知る。以下しばらく高山における茶道とその関連文化について述べよう。

茶道が高山に広く定着したのは、藩主金森家に依るところが大きい。初代長近は素玄法印と称し、利休あるいは織部門下といわれ、^{ありしげ}2代可重は「古田織部の時代は、金森出雲殿尤目ききの功者たり」と評されるほどの目ききであり、^{いづもかたつき}出雲肩衝の逸話も残されている。その子重近はのちに京に出て宗和流をたてた金森宗和である。このように金森家は、代々すぐれた武家茶人を生み出した家柄であり、その影響が町人の間にも及んだことは容易に想像できる。たとえば文政7年に高山の料亭に遊んだ池戸氏の見聞誌「飛驒みやげ」に、「茶箱の紐のとくよりもたて出す薄茶のふく合までかかる興ある樂しみもげに昇平のいさをしならん」とみえる。

茶の隆盛に伴ない茶道具の進展もみられる。その代表的なものが今日高山の特産となっている春慶塗である。春慶塗は元来、堺の絵師春慶が応永頃に創始したもので、桃山時代には茶人の間に茶器・茶簾笥としてもてはやされていた。歴代茶道を好む金森氏が堺春慶に通じていたのは明白である。堺春慶を高山に持ち込み、飛驒春慶^{*1}を創始したのは、慶長17年(1612)の金森宗和と伝えられる。歴代藩主は諸大名との交遊に春慶塗を贈るなどしたため、飛驒春慶の名は高まつた。幕末頃には、郡代の奨励によって大量生産につとめ、江戸や上方へも盛んに売出されるようになった。もともと茶道具が主であった春慶塗も、このころには日用雑器・建具にまで用いられるようになった。

春慶塗の他、焼物も茶道具としてかかせないものであるが、小糸焼・三福寺焼・江名子焼がわずかに見られるのみである。現在までつづく代表的な焼物として、渋草焼が挙げられるが、これは幕末の頃に始まり、一時衰退したのち、明治11年に復興したもので、その歴史は浅い。しかし瀬戸系の生地に九谷系の意匠をほどこした渋草焼には、やはり高山らしい「こうとな」気分を感じさせる。

町家建築とともに、高山で忘れられないものに高山祭の屋台がある。春秋2回の大祭には高山全体がわきかえるような盛り上がりを呈する。かつての城下町で、これほど町人のエネルギーを結集した祭りがあったであろうか。宮本常一氏は、江戸時代の都市の中で武士の町に対して町人の町—多くは非城下町である—を市民的都市と名付け、そこには他の城下町には見ることのできない市民的な祭が盛大に行なわれてきたとされる。^{*2} 例え京都の祇園祭、大阪の天神祭、堺の夜市、博多の山笠、ドンタク、長崎のオクンチなどである。高山の春の山王祭、秋の八幡祭は、まさに市民的都市における市民的な祭とされるものである。

高山祭の始まりは、一般に山王祭が享保元年（1716）、八幡祭が享保3年とされるが、それ以前より両祭が行なわれていた記録がある。すなわち、山王祭はすでに金森時代、承応年間頃に3年に1度ずつ行なわれていたことが、元禄5年（1692）の記録に見える。山王祭は、高山城の鎮護神として金森長近が奉遷した日枝神社の祭礼であり、金森家の保護の下に、早くから行なわれていたものであろう。また八幡祭は享保元年8月にすでに行なわれていた。^{*5}この時には「通り物」がありその順路がわかる。しかし「通り物」が何であるかは不明である。享保3年8月3～7日の八幡祭礼の行列には、「出し1本、神楽、屋たい高砂、屋たい猩々、同浮島太夫夫婦、屋たい湯ノ花、御輿他」^{*6}が出ていている。「紙魚のやどり」によれば、屋台が初めて登場したのはこの年である。山王祭では、同じくこの年に始めて御輿が登場した。^{*7}

高山市史によると、屋台の創建年代のあきらかなものは、元禄年間と伝えられる麒麟台（山王祭、天明4年焼失）を別にすると、享保13年の神馬台・仙人台（ともに八幡祭）がもっとも古く、大半は18世紀後半～19世紀初頭の創建である（表1-24）。文政5年（1822）の山王祭には、すでに15台すべてが出揃っている。享保年間から徐々に建造され、19世紀初にはほぼ出揃ったものであろう。その時期は町民の財力の最も高まった時期に一致している。また19世紀初は、屋台の修理・改造の頻繁に行なわれた時期である。現存する屋台の大半は、この時期に集中的に建造されたものである。明治初期に40台近くあった屋台も、廃台・解体・転売などのため現在は26台（神楽台3台を含む）に減少している。屋台を保存するための屋台蔵は安政以後に建てられたもので、それ以前は解体した屋台を各家で保管し祭礼のときに組立てたものである。

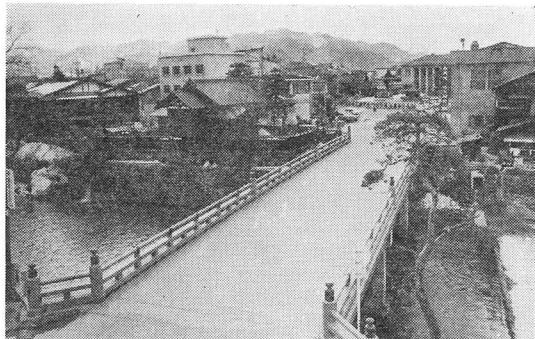
高山祭の屋台の特色は、祇園祭の山鉾に比すべき豪華絢爛たる裝飾性と、巧妙なからくり人形であろう。俗に動く陽明門と称される豊富で精巧な彫刻、京都西陣などでつくられた華麗な刺繡、異国の毛織堅幕、種々の金具や彩色等々がその美しさを引き立てている。屋台建造に当っては、町家建築に才を示した飛驒職人たちの技術と心意気を見逃すことができない。またその費用は莫大なものである。屋台中屈指の美しさと氣品をもつと言われる鳳凰台を例にとると、嘉永4年（1851）の修理に378両余、明治43年の改修に4,000円を要している。これだけの費用を、わずか数戸～数十戸からなる屋台組で負担するのである。屋台にかける高山市民の情熱とその財力のほどが偲ばれる。

町家・屋台を中心に高山の文化遺産をみてきたが、文化財の宝庫といわれる市内には、国・県・市指定の文化財が数多く残されている（表1-27）。

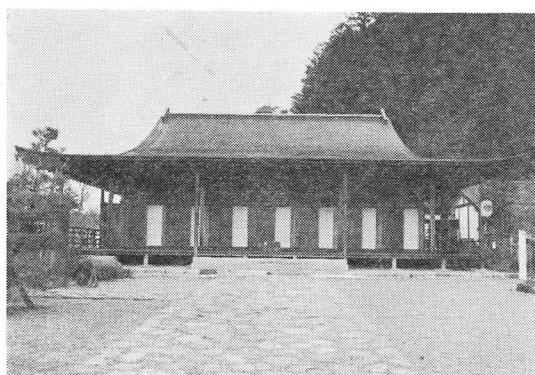
- *3 「庭の千種」一大野郡史
- *4 大野郡史
- *5 「飛驒遣乗合符」一高山市史
- *6 「柚原家日記」一高山市史
- *7 前記「飛驒遣乗合符」
- *8 第一節参照

屋台名	所 有	現存屋台 建造年代	創建年代
山王祭			
神楽台	上一之町上組	嘉永7年	文化年間
三番叟	上一之町中組	文政12年	宝暦年中
麒麟台	上一之町下組	弘化2年	伝宝暦年間
石橋台	上二之町上組	嘉永6年	伝天明年間
五台山	上二之町中組	文化12年	宝暦頃
鳳凰台	上二之町下組	天保6年	寛政11年以前
恵比須台	上三之町上組	嘉永元年	明和年間
竜神台	上三之町下組	明治15年	不 明
嵐岡台	片原町組	嘉永2年	安永3年以前
琴高台	本町一丁目筋	天保9年	文化4年以前
青龍台	川原町組	嘉永4年	明和3年以前
大国台	上川原町組	弘化4年	寛政8年
八幡祭			
神楽台	八幡町組	明治37年	宝永5年
布袋台	下一之町上組	文化11年	天明年間
金鳳台	下一之町上組	嘉永年間	天明年間以前
八大台	下一之町下組	文政元年	文政元年
鳩峰車	下二之町上組	天保8年	延享4年
神馬台	下二之町中組	文政10年	享保3年以前
仙人台	下三之町上組	不 明	享保3年
行神台	下三之町中組	明治16年	文政6年以前
宝珠台	下三之町下組	明治41年	不 明
豊明台	二之新町組	天保6年	不 明
鳳凰台	大新町組	嘉永7年	文政年間か
その他			
神楽台	東山白山神社氏子	弘化4年	弘化4年
神楽台	愛宕神明社氏子	明治初年	不 明
神楽台	飛驒惣社氏子	嘉永3年	嘉永3年
廃台			
山王祭			
黄鶴台	上一之町中組		不 明
大平楽	上一之町上組		文化10年
南車台	上二之町中組		不 明
応龍台	本町二丁目		寛政年間
陵王台	西町組		安政以前
八幡祭			
浦島台	一之新町組		文化5年以前
牛若台	寺内町組		文政元年
文政台	下一之町中組		享保3年以前
船鉾台	下二之町下組		文政六年
その他			
神楽台	一本杉白山神社氏子		

1-24 現存屋台一覧表、附廃台一覧表



1-25 宮川と中橋 遠方にみえるのは旧陣屋



1-26 重要文化財照蓮寺本堂

城下町成立以前のものでは、第一に飛驒国分寺があげられる。境内には創建時代の塔跡（史跡）、室町時代の本堂（重要文化財）のほか、江戸時代の鐘楼門（市指定）と三重塔が残る。彫刻も重要文化財3軀（ともに平安時代）、県指定1軀がある。また莊川村中野から高山城内旧庭樹院屋形跡に移建された照蓮寺本堂（重要文化財）は、^{*9}永正元年（1504）建立の真宗本堂最古の遺構である。

江戸時代以降の文化財では、すでに述べた町家建築、松本家・日下部家・吉島家住宅が重要文化財に指定されているほか、「飛驒民俗村飛驒の里」には高山周辺の民家が数多く（すでに30棟を越え、順次増えている）集められている。このうち田中家住宅が重要文化財、野首家住宅が県指定の文化財である。また重要民俗資料に指定されている飛驒一円の民具も、これらの民家内に展示され、見学者の便に供されている。^{*10}

城下町の象徴、高山城跡は県指定史跡、天領高山の政治的中心である高山陣屋は国指定の史跡として、それぞれ保存の途が取られて^{*11}いる。現存する陣屋は、金森家下屋敷を、享保10年（1725）に代官長谷川庄五郎が改修し、さらに文政13年（1830）に大改修を行ったものの一部—表御門・門番所・御役所・土蔵・郷倉・塀一をのこし

	建造物	美術工芸	史跡	民俗資料・無形文化財	天然記念物
国指定	国分寺本堂 照蓮寺本堂 日下部家住宅 吉島家住宅 田中家住宅 松本家住宅	木造薬師如来座像（国分寺） 木造觀世音菩薩立像（） 太刀無銘（）	飛驒国分寺塔跡 高山陣屋跡	高山祭屋台（23台） 飛驒のそりコレクション（飛驒民俗館） 莊川の養蚕用具（）	飛驒国分寺の大イチョウ
県指定	野首家住宅 東山神明神社絵馬殿 法華寺本堂 東照宮本殿及び唐門透塀 大隆寺鐘堂	金剛神（小林氏蔵） 木造阿弥陀如来座像（国分寺） 鰐口（大隆寺）	莊野文庫土蔵 田中大秀墓他墓3基 高山城跡 赤保木古窯跡他窯跡1箇所 赤保木石器時代火炉 赤保木古墳群 鍋山城跡 松倉城跡	高山祭屋台（飛驒総社、白山神社）	日枝神社の大スギ 高山神明神社の大スギ 白山神社矢立杉 二宮神社のケヤキ
市指定	日枝神社拝殿 一本杉白山神社拝殿 国分寺鐘楼門 天満神社石造鳥居 岩井神社本殿 照蓮寺中門 雲龍寺樓門 飯山寺観音堂・弁財天社 大雄寺山門	桧山及び小丸山古墳副葬品 短刀銘宇多國長（高山水郷土館）他刀2振 金森長近肖像（素玄寺） 軍扇他（素玄寺） 神鏡（国分寺） 円空作金剛神（小林氏蔵） 他仏像12体 雲橋社汁物（加藤氏蔵） 八雲形文台（日野氏蔵） 写経・仏画他（宗猷寺） 角竹郷土史料文庫 加藤光正遺品（法華寺） 梵鐘（照蓮寺） 緋羅紗陣羽織（日枝神社） 加藤竹簾画像他 鰐口・梵鐘（国分寺） 春慶批目曲物他（天満宮）	三仏寺城跡 江戸街道（山口町森下より水呑洞まで） 道分灯籠（荏名神社） 旧陣屋稻荷宮境内地 よしま住居跡 吉野朝時代の伝説地（滝町下平及び塔洞） 桐生町万人講 日焼古窯跡 富田礼彦墓他墓6基	盆踊絵巻物（一本杉白山神社） 日枝神社の算額 金森左京邸付近の古絵図（八幡神社） 神明講火消用具（日枝神社） 飛驒匠木鶴大明神像及び版木（国分寺） 車田（平野氏蔵） 木地師の集団墓地（宗猷寺） 飛驒の里・建造物 国分寺絵馬額 しょがの踊り 親子獅子舞 宗和流茶道（森本花文氏） 飯山寺絵馬額他（小林氏蔵） 愛宕講火消用具（東山神明神社） 東山神明神社絵馬額 庚申さま（下村氏蔵）	杉箇谷神社の大スギ 高山城跡及びその周辺の野鳥生棲地 熊野神社の大スギ

1-27 高山の文化財一覧

ている。

これら文化財の大半は一般に開放されており、高山を訪ずれる人々はその豊富な文化財を自由に鑑賞することができる。このほか重要民俗資料指定の祭屋台を一堂に集めた高山屋台会館、高山特産の春慶塗を集めた飛驒高山春慶会館などがある。

高山の自然 高山は、飛驒山脈（北アルプス）と飛驒山地に囲まれた高原状の高山盆地に開けた都市である。飛驒山地の西方には大汝峰・御前峰を中心とした白山から能郷白山にかけての両白山地が控える。東・北・西の三方を山で囲まれ、わずかに南方にのみ、神通川支流の宮川（下流で益田川となる）にそって開けている。このめぐまれた自然の中で、飛驒には多くの自然公園がある（表1-28）。城山あるいは飛驒の里など、市内の高台に登って四周を展望するならば、東に御岳・乗鞍岳・焼岳・槍穂高連峰から、遠く立山・剣岳を、西には飛驒山地を前景に純白の白山を望むことができ、山都高山を訪ずれた喜びを倍加できるであろう。

高山盆地は遠く3,000m級の山岳で囲まれているが、盆地の中心高山市も7～800mの低い丘陵にすっぽり包まれ、市内を縦断する宮川ぞいにわずかに平野が続いている。高山の自然環境を端的に特徴づけているのは、東山・松倉山などの丘陵と宮川・江名子川の両河川であろう。この地形的特質が、京都と近似したものとして認識されたのは、古く金森時代からである。

高山のひとつの象徴である宮川には清流に泳ぐ鯉、幾重にも架かる橋があり、川辺で毎日早朝に開かれる朝市も宮川の景観を飾る。高山の朝市は、江戸時代末頃照蓮寺門前で開かれていた桑市と、少しおくれて開かれた花市に始まる。慶応3年（1867）には弥生橋詰、明治5年（1872）には中橋詰でも桑夜市が開かれるようになった。明治27年の桑市開設届によれば、6月18日より8月18日までの午前5時～同10時、午後6時～同10時に開かれ、桑のほかに青物・自作野菜も売られている。現在は一年を通じて宮川東岸および陣屋前広場で開かれ、地元住民の便に供するのみでなく、高山を訪ずれる観光客を楽しませている。宮川とともに市内を流れる河川に江名子川がある。小さな流れは、宮川に比すべくもないが、左京橋・若達橋・葵橋・桔梗橋・小柳橋・助六橋・東橋・錦橋などの優雅な名をもつ小さな橋を幾重にも架け、木々の緑を水面にうつす風情は、周囲の町並ともよく調和して高山を訪ずれる人々の心をなごませる。その東岸の東山一帯は多くの木々に囲まれ、静かな雰囲気をよく残している。

市内にはめぐまれた自然を示すかのように、天然記念物に指定された古木が数多く点在しており（表1-27）、高山市もこれらの天然記念物を中心に自然保護行政を積極的に推進している。

- * 9 「重要文化財照蓮寺本堂移築修理工事報告書」重要文化財照蓮寺本堂移築修理委員会 昭35
- * 10 「重要文化財旧田中家住宅修理工事報告書」高山市 昭48
- * 11 「史跡高山陣屋跡修理工事報告書」高山市 昭49

公 園 名	関 係 市 町 村
中部山岳 国立公園	丹生川村、朝日村、高根村、神岡村、上宝村
白山国立公園	莊川村、白川村
飛驒木曽川 国定公園	金山町、下呂町
奥飛騨數河流葉 県立自然公園	古川町、神岡町
宇津江四十八滝 県立自然公園	国府町
位山舟山 県立自然公園	萩原町、宮村、久々野町

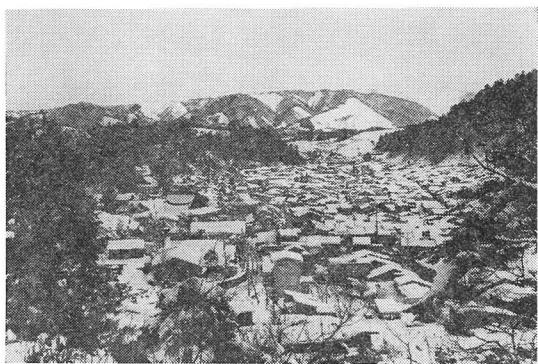
1-28 飛驒地方の自然公園



1-29 宮川べりの朝市



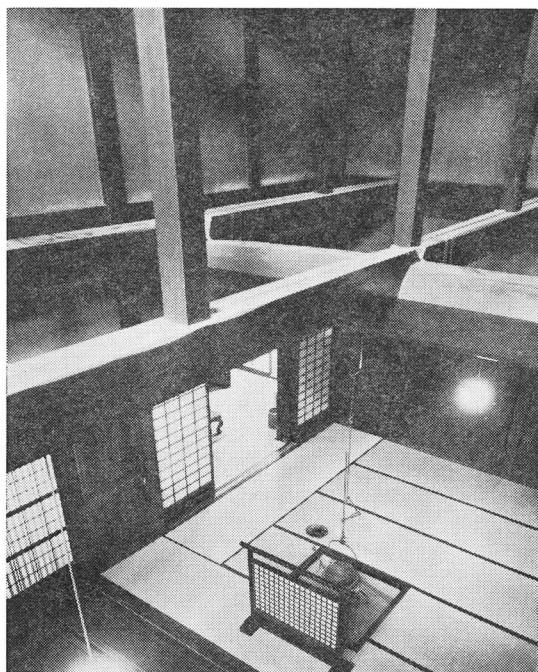
1-30 陣屋前の朝市



1-31 雪の高山



1-32 洋草焼作業風景



1-33 高山の町家内部

*12 岩波新書「日本美の再発見」、岩波書店

*13 飯沢匡「飛驒と円空」（太陽27号、1965.9）

高山の魅力 現在、高山を訪れる人は年間200万人に達する。

これらの人々を引きつける高山の魅力とは何であろうか。

高山は俗に小京都と呼ばれている。他に小京都と称する町は全国に数多い。津和野・金沢・角館等々。これらの中でもっともその名にふさわしいのは高山であろう。「小京都」が意味するところは、日本文化の中心地京都に匹敵する高度な文化をもつとともに、その都市的環境が類似することが必要であろう。

高山文化の質の高さは、これまでみてきたように、当時の諸都市の水準を越えるものである。また市中を縦断する宮川・江名子川、東山の丘陵地帯、周囲を山々で囲まれた小盆地に開けた自然環境も小京都の名にふさわしい。

高山は当初、文字どおり山奥の小城下町であり、近世以後江戸との交通が整備されたが、中央から遠く離れた山間の一小都市にすぎず、高山本線開通後の現在でも辺境という感じはぬぐいきれない。しかし山間の地に盛えた文化都市高山に対する一種のあこがれの感じは古くからあった。すでに江戸時代の見聞誌、旅行案内書などに高山を紹介した記述が見られる。また明治14年刊の「中部及び北方日本旅行案内」は、山好きのお雇い外国人達が執筆したもので、高山を旅の起点あるいは終点とした行程をいくつか紹介案内している。この本は日本で出版された最初の山岳書であり、その中で高山を中心とした旧街道に興味が注がれているのは面白い。明治末から大正初には飛騨山脈登山の黄金時代を迎え、高山は登山基地として重要性をます。昭和11年、市政施行を協議した際、高山の登山基地としての重要性が語られている。そして現在、登山家たちは、松本・富山・甲府とともに高山を山都と呼んでいる。

また高山周辺には焼岳・乗鞍岳・御岳などの火山帶の麓に多くの温泉があり、金森時代より利用されている。「飛驒鑑」の「大道小道之覚」によると、「平湯村湯四ヶ所御座候、岩の越、落合、川原、舟湯と申何も湯、病人に相応仕候故他国も湯治仕候也、平湯も三里下がま田申名湯御座候（下略）」とあり、江戸時代初期にはすでに平湯・蒲田へ通じる道が開発されていた。他国より飛騨の温泉に湯治に来た人々が、途中で高山に立寄る傾向はごく最近まで見られた。昭和30年代前半までは、高山を訪れる観光客の大半は、温泉湯治・乗鞍登山を目的とするものであった。

しかし高山周辺の自然の魅力に引かれてのみ、高山を訪れたものでないことはいうまでもない。すでに昭和初年に高山に来た建築家ブルーノ・タウトは、高山の町並の魅力にひかれている。^{*12} 戦前の民芸趣味流行の際、高山本線開通と重なって高山界隈の民具が買いあされ、東京・大阪方面でブームを呼んだという話も、高山文化を評価するものであろう。^{*13}